

止血デバイスを用いたカテーテル心筋焼灼術後に深部静脈血栓を認めた一例

◎伊藤 杏奈¹⁾、小島 光司¹⁾、林 美月¹⁾、井上 美奈¹⁾、左右田 昌彦¹⁾、鈴木 伯征²⁾、高田 康信²⁾
JA 愛知厚生連 江南厚生病院 診療協同部 臨床検査室¹⁾、JA 愛知厚生連 江南厚生病院 循環器内科²⁾

【背景】

深部静脈血栓症 (DVT) は血流のうっ滞、血管内皮の障害、血液凝固能の亢進がそれぞれ相互に作用して発症する。血管腔を直接縫合するタイプの止血デバイスでは血流のうっ滞や血管内皮の障害を引き起こすことが予測される。今回、大腿静脈への止血デバイス使用後に DVT を発症し、下肢静脈エコー (LUS) にて血栓を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】

患者は 70 代男性。完全房室ブロックに対しペースメーカーの留置歴がある。当院にて心室期外収縮の治療を目的にカテーテル心筋焼灼術 (CA) を行い、CA 後の止血デバイスにパークローズを使用した。CA 後の DVT 評価を目的に LUS を施行した。

【血液所見】

CRP 0.53 mg/dL, Cre 1.12 mg/dL, BNP 75.5 pg/mL,
D-dimer 0.8 μ g/mL, SF 4.9 μ g/mL。
その他特記所見なし。

【LUS 所見】

カテーテル穿刺部より中枢側の右総大腿静脈に内部均一、低エコーの新鮮血栓を認める。血栓の可動性を認めず、血栓周辺の血流は高度に欠損している。血栓による血管の拡張を認めないが、血栓中枢端側で軽度の血管狭窄を認める。

【経過】

抗凝固療法 1 ヶ月後の LUS にて DVT 消失が確認された。

【考察】

本症例は経過および LUS 所見より CA を契機とした DVT と考えた。非心房細動の場合、CA 後の DVT 発生率は 10% 以下との報告があり、本症例は比較的稀な症例であった。穿刺部よりやや中枢側で軽度血管狭窄を認め、狭窄部より末梢側に血栓を認めた。以上より CA に伴う穿刺や止血デバイス使用による血管内皮障害が血栓発生に関与したと考えた。今回の経験から、止血デバイス使用の際には血管内皮障害や血管狭窄に関連した血栓形成のリスクがあることを念頭に、穿刺部よりやや中枢側も観察することが必要と考えた。

連絡先 : 0587-51-3333